

研究生生活を振り返って

武田俊昭

ロンドンオリンピックでは、過去最多のメダル獲得となり日本人の多くが熱中したことと思います。思い起こせば48年前の東京オリンピックが開催された年が、私の研究生生活の出発点でした。当時、関西学院大学の学部生であった私は、親の反対を押し切って、入学したこともあり、自分で勉学の道を探し、友人と二人で研究室を訪ね研究の指導を受けに行きました。助手の方から書物を紹介してもらい、たびたび質問に行き、その熱意から教授を紹介してもらい、研究生生活が始まりました。3年生の時に大学院進学を薦められ、院生と助手を兼務しながら調査研究や学部生のアドバイザー役をしてきました。1万人以上の従業員をもつ大会社のモラル調査のため、全国を走り回っていました。博士課程の夏にはハワイ大学大学院で、カウンセリングとガイダンスの勉強にも参加しました。大企業のカウンセラーも2年間しました。これら青年から成人の発達を中心とした分野から幼児・児童を中心とした発達心理学への転機が訪れました。

ボウルビー研究の第一人者であった黒田実郎教授の博士論文の副査を父がすることになったことから、その後、黒田先生から研究の方向づけの指導を受けることになりました。自宅が幼稚園を経営していたこともあって、私の研究の中心は、幼児・児童の思考の発達に移りました。博士課程の3年生の時から今日まで40年間にわたって、幼児・児童の数概念の発達と指導に関する研究に携わってきました。博士課程修了後、聖和女子大学に勤務することになり、その後2009年に関西学院大学と合併により移籍して今日に至っています。

その間、1年間米国イリノイ大学客員研究員、2年半広島大学大学院研究生として研究の機会が与えられ、数概念の発達と指導に関する研究で、博士（教育学）学位を取得することができました。

私の専門をキーワードで表すと、発達心理学・教育心理学・思考・数概念となります。私は、20世紀最大の発達心理学者であるピアジェの研究をすることになりました。「子どもは大人と同じような物の見方をするのか」、「発達段階が異なると、子どもはどんなふうに異なった見方をするのか」という問い

に対して、J.ピアジェは発達心理学に多大の貢献をしました。また、「知識とは何か」、「人間は知識をどのようにして獲得していくのか」という問題にも、認識論者として取り組んだのです。そしてこの問題を明らかにするには、子どもの思考の発達を研究することが最もよいとピアジェは確信したのです。子どもがいかにして数や量をとらえていくのかは、子どもの教育を考える上で重要な問題のひとつです。近年では、言語を獲得する以前の乳児でも、数の認知能力を持っていることが徐々に明らかにされてきています。私は、子どもの思考の発達、特に数概念の形成過程とその指導について研究してきました。

学会活動としては、日本心理学会・日本教育心理学会・日本保育学会・日本発達心理学会・日本乳幼児教育学会・関西心理学会の正会員として、役員や研究発表をしてきました。社会活動としては、全日本私立幼稚園連合会教育研究委員、全国保母養成協議会常任理事・近畿ブロック会長、日本学術振興会科学研究費委員会専門委員、大学評価・学位授与機構短期大学機関別認証評価委員会専門委員、関西学院大学・大阪教育大学・大阪総合保育大学非常勤講師、芦屋みどり幼稚園理事長、関西学院教会附属仁川幼稚園理事、宝塚厚生幼稚園理事、聖和乳幼児保育センター理事長などです。全国保育士養成協議会より会長表彰（教員の部）と兵庫県より教育功労表彰を受賞しました。これらの研究生生活を振り返って、多くの人に導かれ支えられてきたことに感謝しております。